‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

48号 1992.4.28
文・編集・発行
恋怪子

AXL ROSE N' GUNS N' ROSES

FUNNY HOW EV'RYTHING WAS ROSES
WHEN WE HELD ON TO THE GUNS

FUNNY HOW EV'RYTHING WAS ROSES　WHEN WE HELD ON TO THE GUNS　JUST BECAUSE YOU'RE WINNIN'　DON'T MEAN YOU'RE THE LUCKY ONES

オレはあまりにも完璧主義者だってことでバンドのメンバーから責められている。ま、実際ほんとなんだけどね。自分でもわかってるんだ。ときには、オレが1111って思うまでひとつのことにこだわっているもんだから、全体のプロセスに支障をきたすこともある。事実、オレはあんまりにも完璧主義者なゆえにいろんなことをちゃんと完成させられないんだ。
スタジオでは完璧主義者なうえに、オレは自分のライブ・パフォーマンスに対しても非常に批判的だ。ただどうにかこうにかやり過ごすんじゃなくて、ステージに出たら全力を尽くしたい。おざなりでも観客は喜ぶかもしれないけど、それじゃ嫌な思いをすることになるのはわかってるんだ。
だからオレはツアーでは大変なんだ。何かがうまくいかないと、もうどうかしちゃうから。ツアーでは、オレはつき合いにくいし、一緒に仕事をしてる連中に地獄を見させるよ。基本的にオレの一日はまるまる究極のパフォーマンスをやるために成り立っているわけだから、邪魔したりするものや人は用心したほうがいい。オレはとんでもないぜ。少なくともそいつは認めておこう。ファンたちに飛びきりの夜を届けたいだけさ。オレたちの歌を叫び出したい、それをみんなにちゃんと聞いてもらって、オレたちのショウを楽しんでほしいんだ。
わかるだろう？

POP GEAR誌の記事から、アクセル・ローズのことばを書きうつしていると、アクセルから直接話をきいているような気がしてくる。2月19日、20日、22日の東京ドームでのGUNS N' ROSESのライブを見たから。アクセルのことばからその実体が、その意味するところが視えてくるから。

何かがうまくいかないと、もうどうかしちゃうから

2月19日。アクセルは観客に向って「考えていたようにステージが作られていなかったので、精一杯やるけど、うまくいかなかったら謝まる。これは金の問題ではない。ロックンロールをわからない人たちがいるのだ」ということを通訳を通して話をした。ライブを途中でやめはしなかったけれど「究極のパフォーマンス」がやれなかったからだと思うけど)、最後にモニターを3台ステージから蹴おとした。
2月20日。ステージが前日とちがう作りになっていて、それについてアクセルは通訳を通して、ステージを作りなおしてくれた日本のクルーたちに感謝している、そしてメモを見ながらツアーのスタッフの名前を読みあげその人たちに感謝していると話した。
そのあとライブのまん中あたりで、ステージのまん中のいちばん前に張り出しているところにある台がグラグラしてきて、それをなおすので、すこしライブが中断した。そのことを観客に伝えるために通訳をよんだのだが、通訳がすぐに出てこなくて、アクセルはマイクを放り投げて、ステージからひっこんでしまった。しばらくして「これは技術上(テクニカル)の問題です」との通訳のアナウンスが入って、中断が続いた。私はその中断のあいだ、アクセルがあんなふうになるのは当然だと思っていた。あれほど本気で、あれほど緊張して全力を尽くしてやっていたら、台がグラグラするようなことはその本気が、緊張が崩れて全力を尽くせなくなりかねないことだ。それを伝えようとしてタイミングがあわなかったら、ライブを続けていくテンションが下って「究極のパフォーマンス」ができず「飛びきりの夜をファンに届け」られなくなってしまう。誠実であるということは、こういう局面を見せる。

同じ記事の中でアクセルは「人のどういう面に対していちばん尊敬を抱きますか」という質問にこう答えている。

正直にいって……信念を曲げないで思うままに力や忍耐を貫く人。それと状況が厳しくても立ち直る勇気をもってる人

そして「軽蔑するのはどういう人？」という質問に対する答えは、

実際何かを創り出す頭も才能もあるくせに、自分に正直に生きるよりも、さっさと金を稼ごうと安易な道を選ぶやつ。不誠実も嫌いだ。

信念を曲げないこと、誠実であること。それをことばでいうだけでなく、ことばに実体を与えること、つまり信念を曲げずに生きること、誠実に生きるということは、自分をとりまいているものを強く突き刺し、鋭くかき裂くという局面を持っている。信念を貫くこと、誠実であることはアクセルの場合、

ただどうにかこうにかやり過ごすんじゃなくて、ステージに出たら全力を尽くしたい

ファンたちに飛びきりの夜を届けたい

ということなのだ。だから私はライブが中断しているあいだ、これでライブが終ってしまったとしても、それはアクセルの決断なのだから、それを認めようと考えていた。「一緒に仕事をしてる連中に地獄を見させ、途中でやめたらどれほど非難されるかをよく知っていての決断なのだから。それが誠実ということなのだ。ステージで歌っているアクセル・ローズにいったいどういうことがおこっているかを感じとらずに、あらかじめ予定されたとおりにライブがつづく、と勝手に承知しているとしたら、それはアクセル・ローズのことを、GUNS N' ROSESのことを、ひいては音楽のことを、人間のことをずいぶんわからないでいる、ってことになる。

おざなりでも観客は喜ぶかもしれないけど

と、アクセルのいっているおざなりのライブで喜ぶ観客になってしまうってことだ。

金を儲けてることでこれが買える、あれも買えるって人並みに興奮はできるよ。だけど歌が自分の望むように出てこなけりゃ、ガックンと落ちこんで金なんてオレにはなんの意味もないんだって気分になる。

たしかにこれが買える、あれも買えるって興奮するのは人並みなことだ。そして、アクセル・ローズは、GUNS N' ROSESは並はずれている。何のしかけもないステージで真面目で本気の演奏が3時間つづく。3時間のライブに出された本気のエネルギーと、ステージに出るまでに使われた本気のエネルギー。そのエネルギーの総量は並はずれていて、私は圧倒された。

オレは自分がだれか他の人物になったとか、自分がスーパースターだとか思っていないんだ。ロック・ミュージシャンになることを、この分野でひとかどの者と認められることを、自分自身を表現する自由を与えられることをずっと夢見ていた。

まさにアクセル・ローズはひとかどの者である。全くかなうところがない。それでいて、私にはアクセルが3億の友(ソウルフレンド)だと強く感じられるのである。こう感じているのは私だけではないはず。ライブからずいぶん時間のたった現在でもまだ、GUNS N' ROSESのライブがどんなにすばらしかったか、どんなに魅入られたか、という話があちこちで生々ととびかっている。みんな「飛びきりの夜」を体験したのだ。そして、そのことを他人(ひと)に語らずにはいられない。本気できいた者ほどそれが強い。並はずれたGUNS N' ROSESを本気でうけとめた者は、やはり並はずれた者になれる。実際の体験は一度だけ。あとはくり返しくり返しそれを他人に語り、自分自身に語ることで一瞬の体験が肥大していく…。ここに伝説の種があり、それがもう芽を出しはじめている。

AXL ROSE N' GUNS N' ROSES

(文中アクセルのことばは全てPOP GEAR 12月号より)